

## 地域と連携・協働した Interprofessional Education の展開

### —地域の評価と学生の学びに関する検討—

○ 埼玉県立大学 寫末 憲子 (03901)

新井 利民 (埼玉県立大学・04651) 小川 孔美 (埼玉県立大学・04527)、

佐藤 進 (埼玉県立大学・03596)

キーワード：Interprofessional Work (IPW)、連携・協働、社会福祉士教育

#### 1. 研究目的

本研究では、2006年から2008年に地域と連携・協働して実施した4学科4年生(看護・理学・作業・社会福祉)合同のインタープロフェッショナル演習(以下、IP演習とする)における学生の学びを分析し、社会福祉教育との連続性の観点から意義と課題を検討することを目的とする。また、IP演習にかかわった施設や機関、ファシリテータや家族からの評価をふまえ、地域と連携・協働したIP演習の今後の展開について示唆を得たい。

#### 2. 研究の視点および方法

- 1) 学生個人(2007:42名)の振り返り記述をKJ法により分析した全体像について、社会福祉士教育との連続性や地域・現場との関係について検討する。
- 2) A県B地域における3パターン(個人・集団・地域)の担当事例(自己による記述・参与観察データ)より、社会福祉学科学生の関わりについて専門教育の観点から検討する(2006~2008)。
- 3) IP演習を受け入れた施設ファシリテータ(2008:18名)の振り返り記述より、現場や地域のメリットを整理する。
- 4) 地域課題をもとに展開したIP演習報告会と専門職連携推進会議(地域拡大版)のアンケート結果(2008:16名)より、地域で展開する意義について検討する。

#### 3. 倫理的配慮

学生や利用者、施設には事前に説明し、承諾を得てインタビュー等を実施した。報告会や報告書作成、研究発表においても、個人情報保護を遵守した。

#### 4. 研究結果及び考察

##### 1) 学生の学び(変化)の全体像

【チーム】【自他の専門的特徴の理解】【利用者中心】【利用者理解と支援計画】【施設にみる連携の姿】【専門教育】【振り返ったこと・その他】の7カテゴリーが抽出された。これらのうち【利用者中心】が軸となり、【利用者理解と支援計画】【チーム】【自他の専門的特徴の理解】の3カテゴリーが関連し、利用者(個別と集団)の支援計画検討による変化を示しており、各々の連続性を示唆する「接点」カテゴリーが存在している。

また、IP演習が専門教育との連続性の上に成り立つことを意味する【専門教育】は<専門学習との連続性><これまでの経験実習>に分類される。IP演習を現場にて実施することを意味づける【施設にみる連携の姿】が得られ、現場職員へのインタビュー等を通

じ、利用者中心の支援を目指す思いに触れる体験は、チーム形成の動機を高め、チームケアの理想的援助を実感する貴重な機会として捉えていることが分かった。さらに、学生自身の変化として、【振り返ったこと・その他】が確認された。

2) ①個別利用者の支援計画への取組では、利用者へのインタビューを自然に実施し、地域を生活レベルで把握すること等を提案できていた。②介護予防事業に参加する集団への支援では、混迷するメンバーを支援したり、見えにくい利用者のニーズに着目し、インフォーマルケアラーや市民にまで視点を広げることができていた。③認知症高齢者に関する地域課題をテーマとした展開（福祉保健総合センター）では、社会資源を理解して家族インタビューを実施し、見えにくい利用者のニーズを理解する必要性について提案できていた。④共通して不十分であったのは、介護職の役割やケア内容に関することであった。

### 3) 現場や地域のメリット

I P 演習を引き受ける意義・メリットは①利用者・家族、②施設ファシリテータ、③現場、④地域の4つに分類された。①では、学生との交流を通じた感謝や喜びが表現されていた。長期的には現場が変わることが利用者のメリットであるという回答も見られた。②では、「事前調整による刺激」、「連携・協働の必要性の認識化」、「チーム形成のプロセス理解」、「受けた研修の現場活用」等、前向きなものが多かった。③では「インタビュー時の多職種理解促進」、「利用者中心の支援への刺激」、「施設内報告を通じた連携・協働の認識共有」、「プランの活用」等が確認された。④については、地域課題をテーマとした機関以外は少なかった。

### 4) 地域課題をテーマにした場合の意義

家族会の発言や学生の支援計画を今後活かすことや、I P 演習への期待が多かった。学生は、報告会にて曖昧であった地域を実感し、意義を再確認できていた。

## 5. 結論

- 1) 学生にとってI P 演習の体験は多職種理解を促進しており、I P Wの原体験となる可能性が見受けられる。
- 2) I P 演習では、社会福祉教育で培ってきた理念や知識・技術等を活かすことができた。
- 3) ファシリテータが核になり、現場で連携・協働が進むことが確認された。利用者や地域への意義は、長期的展望をもつ必要がある。
- 4) 地域課題をテーマとしたI P 演習は、学生のみならずファシリテータや利用者・家族の参加意欲を高めていた。地域でのI P Wを促進すべく、今後も地域課題を継続して取り上げていくことが重要である。

- ・本研究は文部科学省現代G P「保健医療福祉の専門職連携教育」（2006～2008）の成果の一部である。
- ・他の共同研究者：杉山明伸・朝日雅也、K J法の検討は大塚真理子・國澤尚子・田野ルミと共に分析した。2008年のA地域福祉保健総合センターは、木下聖も担当した。
- ・参考文献：埼玉県立大学編『I P Wを学ぶ～利用者中心の保健医療福祉連携～』中央法規、2009年